

では従来の授業のスタイル―教師の講義、板書、ノート、試験―を打ち破ってどうやったか「HRのような授業」を創り出せるか、模索が始まっている。

(9)

生徒把握をどのようにするかの方法論は生徒をどうみるかという本質と密接に関わる。

ことし、新入生をむかえるにあたってどうやって早期に生徒の実態をつかむかが課題とされ、教務部長はその方法を次のように提案した。

「生活調査書によって家庭環境、入試成績、中学時内申書、面接、新入生実力テスト等によって一人ひとりの詳細なカルテを作成する」これに対して職員会議では次のような意見が出された。

「子どもを知るといのは、子どもを教育の受動的な対象として、そのデータを集めるということではあるまい。それが必要ではあるが、私たちの教育的な働きかけをとおして子ども自身が集団の中でどう変わっていくのかを見るのではないか」

「子どもを知るといふ活動自体が教育的であり、知る過程の中でも何かを教えていくものであるはずだ。知ってから教育をはじめるといふのではやっぱりフルイワケではないか。」こうした意見をふまえた新入生カルテは大幅に変更された。

「新入生は学年レクを直ちにくみ、そこにむけてクラスのとりくみをつくる。全校集団づくりの意図的な指導、働きかけの中で一挙に本校の生徒としての自覚を作っていく。そのとりくみをとおしてそれぞれの生徒がどう動いていくかみていく、それらの指導と並

行してカウンセリングは生徒をとりまく環境を一つひとつふまえながら、高校生としてのガイダンスを加えてすすめていく。」と。

(10)

きわめて控え目な報告に終わった。「こんなひどい生徒もいるで」「こんな驚くべき事実もあるぞ」と並べたてる高校生論には少々食傷気味である。どんなに実態がひどくても何とかしなくちゃならないのだから、どこからそのきっかけをつかむか―それだけを考へて書いた。でもまだ、実践はそれを仮説としてでも成立させえていないし、今日もまた悪戦苦闘をつづけている。

(新潟短大附属高校)

現代学生の姿とそれを取り巻く諸問題

―教育学部生を中心に―



鈴木賢治

一般に、学生の現状をあげつらって、それを今までの古い尺度で批判し、非難しがちな傾向がマス・コミにあり、その一方では軽薄な学生像を作り出している。しかし、このよ

うな視点からは、何ら生産的なものは生まれてこない。学生と現場で接していると、このような否定的な面に目を奪われがちになるむずかしさを常々感じる毎日である。そのよう

な中での、私の狭い経験を通しての学生の姿をみてみたい。また、学生にきざみこまれた矛盾は大人社会の責任でもあり、それは学生と大人との今後の課題でもある。この点につ

いても私見を述べる。

1 ゆたかさを求める学生生活

大学生は、現在どのようなことに重点をおいて生活を送っているのであろうか。大学生協連の調査によれば、新潟大学の学生生活の重点は、人間関係(二二・八%)、重点なくほどほどに(二一・五%)、勉強(一九・九%)、サークル活動(二五・二%)、趣味(一一・七%)、なんとなく(五・一%)となっている。全国の結果と比較して重点なくほどほどにが五・七%高いのが少々気になるが、ほぼ全国平均と一致している。これらの重点は、学年によって変化し、一年のときはサークルに入るなどして人間関係を広げ、二年ではほどほどに組み合わせて、四年では勉強に目を向ける傾向が強くなる。一言でいえば、今日の学生生活は以前に比較して多様である。たとえば、サークルや趣味を生活の重点にあげる学生が一定の割合いることは、自分の生活をゆたかにしたいというものを感じさせる。また、生活のゆたかさ多様さの中にも個を非常に重視していることも学生の特徴ではないだろうか。「わたし」の生活には、とても敏感であり関心がつよい。生活に直接関係することに目を向ける傾向があり、食事は席を確保して仲間と楽しく食べたいなどの要求が以前よりもつよく、大学の食堂では荷物を置いて席を取ってから食券を買う学生が

増えてきている。これは、大学生協への要望の投書(虹の声)にもさまざまな声が、毎月多数寄せられることにも現われている。戦前のような滅私奉公的な学生とはいえないが、評価できるのではないだろうか。自分の内面的な要求なしにただ社会のためにいうことに比べれば、「わたし」が「わたし」らしく生活するための民主主義の要件として、今日の学生の「個の尊重」を大切に育てなければならぬ。しかし、次々にでてくるニュー・ファッションの商品にふりまわされて、来当の人間らしさやゆたかさがみえなくなる心配もある。また、個だけで社会的な広がりにつけることには注意しなければならぬ。

下宿生の平均収入の月額額は八二、九四〇円であり、そのうち九、九〇〇円がアルバイトによるものである。自宅生のアルバイトは、一五、八一〇円と下宿生よりも高くなっている。現在、六三・九%の学生がアルバイトをしているが、その目的は生活にゆとりを求めるものが多く、ついでレジャー・大型商品の購入となっている。通学では家用車が増えて大学キャンパスの駐車場はもう満車であり、電気製品も以前に比較すればかなり生活の中に入っている。しかし、学費の相次ぐ高騰により、以前に比べて経済的に親から自立して生活することが大変困難になっている。また地元の出身が多いこともあり、車などの大型商品の購入や進路の選択などをみていると、

親の存在が経済面および精神面で大きくなっている。青年期は、経済的・精神的に自立して生活する時期でもあると考え、もともと自分の目的意識をもって生活してもよいのではないだろうか。

さらに、文化状況が学生に与える影響も大きい。そもそも、独占資本主義のもとでの文化は、商品化と深くかかわっている。売れるものをつくりだす商品の論理は、文化の内容そのものは問わない。そこでは、文化の受け手は消費者とみなされ「文化の享受」というより「文化の消費」的な性格がつよくなる。ベスト・セラーや大衆音楽の典型である歌謡界はそのいい例である。学生の学術・文化の集約的な存在である大学祭も年々、スポンサーの入った行事が中心になりはじめている。しかし、それでは学生からかけはなれた大学祭になり、いつまで続くのか疑問である。今日の人々にとって生活をゆたかにしたいという要求の中にはそれなりの価値観がある。たとえば、映画「お葬式」が大きな反響をよんだが、監督の伊丹十三もこの映画が評価されたのもそれだけ今の映画にはつまらないものが多いからだと言っている。大学祭でも、文化の評価・創造の意味での主体として学生を位置付けなければ、学生の積極的な参加はますます望めないものになる。その点、ゼミナール運動やサークル活動の意義は非常に大きい。文化の主体としての学生のこれらの運動は、多くの困難はあるけれども文化の主体として

の自覚と結びつき、ゆたかな学生の文化を築き上げるならば、大きな発展を遂げる可能性を秘めているのではないだろうか。

また、マス・コミなどにより大学はレジャーランド化しているような見方をつくられていが、それについてみておく必要がある。現代の学生生活の中に娯楽が一定の位置を占めているのは事実である。だが、それを退廃とみて生活の中から切り放すのは正しくない。息の詰まるような生活ばかりで虚無感や孤立感に押しつぶされているよりも、スキー、テニス、ハイキングなどの中で娯楽性にとどまらず、生命感や存在感のあるものを得られるならば健全である。たとえば、いまの学生はよくマンガを読むということを考えてみよう。私の科の学生控室にも近年マンガの文庫が置かれ、実際にそのとおりと思う。率直に言えば、おもしろいから学生はマンガを読むわけだが、商業主義の中でいたずらに性とか暴力とか刺激のつよさをきそうマンガもあれば、内容のあるマンガもあり、マンガの中にもこのような二つの流れがある。学生のマンガ傾向をみれば、後者のほうである。たとえば、「カムイ伝」(史的唯物論の立場で封建社会をリアルに描いている白土三平のマンガ)を入れておけば非常に感動している。けっして、学生の感受性が破壊されているわけではない。学生の享受するさまざまな文化素材の中で、マンガであればマンガの中身を分析して文化のありかたを再構築する努力も大切である。

2 進路選択と学習関心

大学生をみる場合、どのような目的で大学に入学したかは、学生の姿勢とかかわりをもつ。共通一次と進路選択に関するある地方大学の教育学部学生を対象にしたアンケートによれば、大学選択の動機は県外の場合、共通一次の判断によるもの(三三%)、二次試験の科目が得意科目であるから(二二%)となっている。一方、県内の場合、地元国立(四五%)、教員志望(二七%)となっている。学習関心については、「将来の自分を築くために在学中に何を勉強したいか」の問いに対して、教養・知識(二九%)、人間性を深める・人間関係・人生経験など自己・人間についてが(二六%)、教師準備(一二%)、専門(二〇%)となっている。このなかで、教師になるための準備と専門の勉強を区別していることは注目すべきことである。これは教員採用試験が大学で個々の学問を学ぶことを重視していない現状を反映している結果である。教育という仕事は専門と深いかわりをもっていることを忘れることは、学問がなくても学校教育ができるという誤りを犯すことにつながる。長い間、現場の教育に携わってきた金沢嘉市氏は、

知った喜び、そしてみずから考えてわかった喜び……それが教育である。しかもその過程には安易にはわからない学問のきびしさも経験しなければならぬ。それを歴史の授業の中で私は知ったのである。そして子どもたちも体験したのである。

小学校の子どもだからと言って甘えさせてはならない。小学校のうちから、学問の尊さ、きびしさを体得する教育こそ必要である。生活教育、経験主義教育のみで、そのうわべだけをはいずり回っているよりも、学問としての体系を尊重する基礎的な学習をきびしくしかも徹底させなくてはならない。」(ある小学校長の回想、岩波新書六五ページ)と述べている。

さらに、先の学習関心についてのアンケート結果を「第一志望・併願校なし」の学生だけをクローズアップすると、教養・知識(四一%)・教師準備(二四%)、自己・人間(一五%)、専門(六%)となっている。教養・知識、教師準備の比率が増加して自己・人間、専門が減少する。大学は、学生の学問の場と青年としての人間形成の場でもあることを考えると、学生の歪みがみえてくる。このような学生の場合、受験する大学は一本にしばって、作戦通り合格し、自我の模索にエネルギーを注ぐよりも、自分の将来の基礎を築くために教師準備はしっかりやるという特徴が得られる。大学を就職に直結させた非常に効率観念の発達した人間像が浮かび上がっ

てくる。所属でもどちらかといえば、実験や実技を伴う学科は敬遠される。これには、「高度経済成長」で生活の合理化も進んで自動販売機的な生活に慣れたことと関係するように思える。たとえば、幼稚園の子どもが最近はずり台にのぼらないなど、からだを使うことを嫌う傾向がよくなっている。学生の全人格的は発達や学問に対する正しい知識が歪んでいることは、現代の日本の教育事情、受験、就職、進路指導が学生に大きな影響を与えてきているといわざるを得ない。

3 学生と勉学

教育学部の学生の講義の取り方は、教員免許との関係があり、複雑で非体系的なものになりがちである。不本意であっても、現実には厳しいところを避け、単位のもらえるところへと流れることも必要となる。極端になれば、とにかく単位をあまり出さないと次年度には聴講生が半分に減ってしまい、楽勝であれば倍になることすらある。教育学部の場合には自分の所属などの専門のほかに教職科目が多く、朝から夕方まで免許のための講義に駆け回わる。これが教職の専門性を高めることなのだろうか。真の教職の専門性をめざすなら専門の学問研究と教育全体が系統的であり、かつ科学としての内容を保障する学問教育の体系が必須となるはずである。今のように免許法で縛られたり、教員採用で有利だとい

て複数の免許を取ることで、よりよい教師を育てることとはかけはなれたものになる。これを踏まえた上で、講義や実習などの中の学生の姿をみてみよう。

私は機械の講義を技術科の学生を対象に行なっている。二年生には機械を理解する材料力学、流体力学、熱力学を中心に講義をする。教育学部は「文系」という進路指導の影響や第一志望からまわされたことなどにより、学部の専門の講義を聴講してとまどうのがこの学年である。講義のなかでは、機械の学問体系を示すと同時に機械を理解するにはどのような基礎的な力を「必要」とするのかを示すことにしている。しかしながら、私自身の未熟さもあって「わからない」という層の学生が生じるのも実情である。ただし、「わからない」ということは全く意見がないとか、要求がないということではない。

さて、「必要」とは本人の自覚のあるなしにかかわらず、それなしにはその内容をさらに進んでいけないものであり、一つの客観的なものである。「必要」が満たされなければ「不満」が出てくる。「不満」は漠然としたものであるが、自分に必要なものはこれだと自覚的な意識になれば「要求」が生まれる。たとえば、「必要」であるものは講義のなかで明確に学生に示せば、夏期に学習会をやってほしいなどの声として現われ、実際に学習会を開いたこともある。それに参加した学生もなかなかおもしろかったと感想を述べてい

た。何はともあれ、はたらきかければ変わることを肝に命じる必要がある。

実習の前期は、実験を行なって、それについてみんなでディスカッションすることを重視している。最初の頃は、どのように準備するかを論議できない、仕事の分担ができない、結局のところ何をどこまでやらなければならぬかを決めないで、うやむやにしたまま次週のその日を迎えるのである。しかし、これを読めるにしたがって少しずつ育ってくる、たんなる特効薬はないようである。ある目的にそって人間が有機的に結合して活動することの重要性がかららず、そのためにどのような組織化するかを考えない。集団性や自治能力に乏しい現状がある。特に、まとめ役的な存在がいないことが、集団が円滑に運営できない一因である。一肌脱ぐ人物がなぜ育たないのであるか。後期は学生が設計をして製作することになっている。これは自分たちの学んだことをフルに使用して本物を作り上げることや集約的な作業形態により集団性が必要であり、技術家らしい内容である。そのなかでは、慣れない仕事にまつくことも多いが、思いもしない努力やアイディアもでてくるものである。このような機会は学生にとってこれからも重要になるといえる。また、ゼミやディスカッションで気がつくことは自分の意見を持って、それを積極的に出し合って正しいものを得ていくことが苦手なことである。雑談と違ってテーマにそって討論するような

場での弱さは、正式な場での弱さにつながり民主主義の形骸化になりかねない。

4 社会の反映としての学生の意識

このような学生の状況は、学生が育ったこの日本社会の情勢と密接な関係にある。現在の学生が、中・高時代を過ごしたのは一九七五年以降である。この七〇年代後半は、高度経済成長が破綻し、資本主義国の構造的な不況が著しくなってきた時代でもある。また、政治の分野でも民主勢力の伸び悩みがあった時代でもあり、この情勢はまだ終止符が打たれたとはいえない、多くの職場においても合理化・倒産が相次いで起るなど社会不安が広がっている。それらが、一人ひとりの労働者・国民にどのような影響を与え、どのような行動をとらせたのであろうか。今日の情勢に対する認識・意識・行動は子どもに大きな影響を与えたはずである。

大学生協連の全国の大学生の出身家庭調べをみると、公務員二二・二%、大企業一九・九%、中小企業経営者五・一%ではほぼ占められる。この中でも管理職・経営者は二七・六%になる。これらの家庭のなかで子どもたちは、どのように育ったのだろうか、親は子どもにどのように言い聞かせてきたのだろうか。管理職に付くために口には出せぬ苦勞をしてきた親もいるだろうし、上の言うことにはとにかく従って来た人も少なくないだろう。管

理職でなくとも合理化の対象にならないように、自分の家族だけには辛い思いをさせることのないようにと考え生きてきた親も少なくない。第二組合を支持して会社に残ることも必要だったかもしれない。教育学部には、教員の親を持つ学生も多い。「学閥」に入らなければ何かと肩身が狭いとか、教頭・校長になるためには関係に熱中さなければならぬ親もいるだろう。お中元・お歳暮と付け届けやゴマをするのをよく見たという話を学生から耳にすることもある。

七〇年代前半までは革新の上げ潮ムードがあり、たくさん革新自治体も誕生した。ストライキをやれば給料も上がっていく状況であった。それに対し今日の学生が育った七〇年代後半以後は正論がまかり通らず、反共攻撃に象徴されるように民主勢力への激しい攻撃がかけられた。日教組批判も繰り広げられ「日教組のために非行が増えた」と国会でも言われた（年々、組織率が低下していることを考えれば非行は治まるはずであるが）。この手の低劣なものから、社内教育による徹底したもの、挙げ句の果には職場における見せしめとしての暴力的攻撃が行なわれた。そして、労働者・国民の権利や暮らしを守るために何らかの行動に立ち上がるのが大切な時代でもあったことを意味している。しかし、そのような状況であるがゆえに正論を叫ぶことが自分の立場を悪くするようなことが多いのも事実であった。

見て見ぬふりをしたり、強い者の味方に立ったりしていた親をみていた子どもたちはそこから何かを感じとったに違いない、いじめ、一肌脱ぐ存在がない、クラスに正統派がいな、無関心などの子ども問題行動は大人社会の情勢とよく似ていると言わざるを得ない。七〇年代後半からの親たちは、何でもよいから周囲には目をくれず自分には損になることを避けて自分の受験勉強に専念することに期待することが多かったと考えることは不自然ではない。社会正義と個人の生き方を統一して自己の主張を持って行動することが困難になっていることが、成長過程の子どもの意識形成にとってどれほど非教育的であり、悪影響をおよぼしているかを真剣に考える時期にきているのではないだろうか。

学生の意識は、社会情勢と深くかかわっており、このことをさらに具体的に学生の意識動向からみてみよう。学生の平和意識の調査がある。これは、九州大学の教員の平和問題研究会が九州・沖縄地区の大学生の調査を行ったものである。「平和」をどの程度の射程距離でとらえているかを調べると、「平和」をあくまで個人の範囲でとらえようとするもの（自分が安定した精神状態を確保できれば「平和」だ）一九%、同様に肉親・親戚とするもの（少なくとも彼らに危険が及ばなければ「平和だ」）二二%、そして地球全体とするもの（現代の「平和」は地球全体が平和であることが基本だ）一九%となっている。ゆ

えに、四〇%以上の学生が「平和」をせいぜい肉親・親戚の範囲でしかとらえられないことになる。このような認識の狭さがけっして「平和」だけにとどまらず、仕事や多くの面で現われるとしたら重大なことである。もし彼らが教師になって、教育に関する諸問題を個人せいぜいクラスの範囲でしかとらえられないなら、これからの教育はどうなるのだろうか。現に、臨教審や教員採用など多くの問題が教師をはじめ国民に投げ掛けられているのに職場ではほとんど話されないのである。これらの認識の狭い現象は学生に限ったことではなく社会全体にわたっている。今日の社会情勢に対して正しい展望を持たずに生きてきたことは、このような認識の狭さを招き、ひいては若い世代をも飲み込んでしまうのである。

ここ一〇年が、学生や子どもの意識形成に悪影響をおよぼしてきたことを教訓としなければならぬ。それゆえに、今後の民主勢力の前進・進歩は学生や子ども意識形成に大きなかつ貴重な影響をあたえるであろう。教育にたずさわるものが、子どもや学生の前で、職場のなかで真の教育はなんであるかを明確に示すことが重要であり、大きな期待と責任を担っている。



5 未来の教師をむしばむ新潟県の 教員採用と「学閥」

以上のような学生の動向に加えて教育学部の学生には採用試験と「学閥」問題の暗い影がのしかかる。

まず、これからの教員採用数は減少傾向にあり、勉学と教員採用の板ばさみとなり学生の矛盾を激化させる。なぜならば、現在の教員採用試験の内容は、教育には学閥が必要であることを意識させるような試験であればよいのだが、現実はその逆である。大学人としてどれだけ真剣に学問を積んだのかを判断するようにはなっておらず、暗記的かつ教条的な試験内容になっている。中学生用の参考書や高校受験の問題集をいやおうなくしなければならぬ。こんな実りのないことをいつまで続けるのだろうか。学生の学ぶ姿勢を大切にし育てる教員採用試験の在り方が、よりよい教育をめざすことと矛盾することはないはずである。不合理な採用試験は、第一に適性能力の参考資料になり得ない。第二に、厳しくなりつつある現在の採用試験に合格することを目的にして、学生の学習や授業方法が変化することがあれば、大学の自治・学問の自由にかかわる問題である。特に、採用での不合格という判定は大学における資格認定の実質的否定であると意識するか否かは、自治意識、学問研究の自由の主張と深いかわりを

もっている。第三には、男女差別や思想差別などの憲法じゅうりんのないように公明正大であるべき教員採用の中身が、全くベールに包まれてあたかも情実・コネがまかり通れるようになったことは、学生に対してさらなる不安を煽る結果になっている。しかも、これを裏付けるかのように昭和六〇年度採用においては名簿登録されながらも内定の得られない学生が相当数に上った。他の就職を見送り、教員採用の内定を待っていたこれらの学生の心は、熱い鉄を流し込まれた気持ちであっただろう。胸が痛む思いである。

このような状況のなかで学生は、「こんな教採ではいけない」という意識を持つ一方で、「自分だけは」という意識を持ち、この矛盾が並存している。この自己矛盾を自覚して克服するようなまとまった意識に発展しなければならぬ。それには、一定の価値観にもとづく批判が成立しなければならぬ。ここに弱さがあれば、能動的な力が発揮されずに終わってしまう。受験体制のなかくぐり抜けてきた学生にとってはこの面での弱さがある。教員採用に合格することのみをまずは考えるといった、効率観念の発達した受験の爪跡が現われると同時に、教員採用制度の無意味さが現われている。この現状を打開するために、民主主義の思想や教育とは何かを真剣に学び考える教育環境が必要であり、よりよい未来の教師になれる知性と判断力を育てなければならぬ。また、このような状況のなか

で確実に学生の不満が増加している。この打開のために学生自治会も運動を進めようとしている状況すらうまれている。

学生に対する心配なもう一つの暗い影は「学閥」問題である。学閥に入らなければ地元へ帰れないのかなどの心配をしている学生もいる。さらには、教育実習にいった「学閥」に入ることを勧められたという話すら起っている。「学閥」によって教員の人事がどのように動かされるか、自分も誘われるのか、そんなにひどいのかなど学生の関心事でもある。しかし結局のところ、それとどのようにうまく付き合って利用するかを考えるか、その逆に批判して「学閥」をどのようになくしていくかを考えるか二つに一つである。あまりにも「学閥」支配の激しさの中で、学生がこれを批判するにも大変な覚悟を必要とする有様である。市民は願ってもいないのに、公的存在であるはずの学校が「学閥」で色分けされている。教育委員会や「学閥」をベースにした研修の場が多く、教師の自主的・民主的な研修の場が少ない。上は県教育委員会から下は各学校まで、管理職ポストや人事異動が「学閥」がらみで行なわれ、差別の温床になっている。しかも、年々厳しくなる教員採用の中でいわゆる後輩の採用に対する援助という名目で「学閥」の抗争はエスカレートすることが懸念される。「学閥」の勢力拡大を目的とした採用に対する援助とは、結局のところ他の閥よりも自分の閥を有利に導くため

に恩を売ることから始まる。それは、教員採用のよりよい改善とは逆に、現在の禍根をさらに助長する。そして、学生の学閥に対する姿勢を形骸化させ、大学の予備校化を促すことにならざるを得ない。「学閥」支配を打開し正常な新潟県の教育を取り戻すためにも、県政の責任としてまともな教育行政を行なうように広範な人々の声をあらゆる形で県政に反映されるように努力することが必要である。また、民主的な職場・教育のためにも教職員組合が、「学閥」支配から独立することが課題となっている。さらに、「学閥」支配にマヒした状況を省みるためにも多くの場でこれを問題にしていくなが必要である。

学生は、社会の変化とともに新しい生活様式・価値観をもつ存在であるが、それを灰色一色に塗りつぶすことでなく、そのなかに未来の展望を発見する努力が必要である、このことを考えると、現代の学生の現状と展望を明らかにすることは、そうたやすいことではない感がある。様々な苦しい情勢のなかで活路を見つけ出そうとする学生への信頼がなければ何の展望も生まれてこない。そのために、われわれは活路を見つけ出そうとしている学生の姿をリアルにつかむ厳しい努力を続けなければならない。

(新潟大学教育学部 講師)

表紙絵について

宮本 敏

幾度か万代橋を画いてみると、この橋はまったく新潟市の風土に合っていると感ずる。万代橋のもとには大きなホテルが並んでいる。そのラウンジに入ってレモン・ティーを飲みながら、ゆったりとした気持ちで画いたのがこれである。波の美しさと橋の美しさがそれぞれに独自でありながら調和しているのを感じず。昔から、わが新潟はこの風景を味わってきたと思うと感一人である。

